

この世に生まれた瞬間、耳に響く大切なわが子の泣き声。この世に起きる素晴らしい奇跡である命の誕生に感謝し「自分の一生を懸けて、この子を守っていこう」と誓います。その誓いは、いつまでも親の心に残ります。それは、子どもが大きくなっても一緒。自分の身長を超えても、力が強くなっても、自分の子どもは大切な子どもです。

「ありがとう」という言葉は、「有り難し」から生まれています。奇跡のような、有り得ないことに感謝することが「ありがとう」なのだ。

「生まれてきてくれて有り難う」。「生んでくれて有り難う」。

当たり前にあるような出来事に理屈ではなく感謝し続けながら、人は成長を続けます。だから、私たちは苦しいときでも「ありがとう」という言葉を使うことができるのではないのでしょうか。

人は、子どものころから夢を持ち、その夢に向かって一生懸命走り続けます。かなえない夢は、人生を重ねるうちに次第に変化しながら、人生を充実させます。

しかし、年齢を重ねるごとに、自分の人生は、自分のためだけの

あ が と 有り難うって 伝えよう

ものではないことに気が付きません。そのきっかけの一つがわが子の誕生です。

しかし、子どもが生まれることで、自分の夢が無くなることはありません。高見浩一さんのように大志さんと一緒に親子で太鼓の道を歩むこともできます。大村詠一さんのように娘を育てながら自分の夢を持ち続けることもできます。夢は、一人でかなえるものではなく、大切な人と一緒にかなえるものなのです。

わが子を見て思う「この子のためなら死ねる」という感情。それが「無償の愛」なのでしょう。無償の愛は、人々を温かく包み、幸せにします。

自己中心的な考えではない「無償の愛」。この世の中で、それを知ることができれば、本当の意味で人のために動くことができるでしょう。それは、大津の「未来への愛情」に他なりません。本当に大切なのは、次世代に残していくことなのです。

決して、自分のためだけに行動することが駄目なことではありません。子どもが、大好きな人が、笑ってくれるなら、どんな努力も惜しくない。そんな気持ちを持つ

てほしいのです。自分に子どもがいなくても、全てつながっている。「未来への愛情」は残すことができます。それは、社会においてとても大切なことです。

「明日死ぬかのように生きろ。永遠に生きるかのように学べ」
(Live as if you were to die tomorrow. Learn as if you were to live forever.)

インドの政治家マハトマ・ガンジーの言葉です。学んだこと、知り得たことは、自分に生かせるだけではありません。他人にも生かして、受け継ぐことができます。

「第一の夜明け」の前から、大津の先人たちは、それを行ってききました。だから今の大津町があるのです。「日本一子育てに夢が持てる町」はそういった積み重ねがあつてこそ生まれたのです。

子どもを育てながら、自分たちも成長していきましょう。子どもに愛情を持ちながら、自分を褒めて、感謝していきましょう。

「まちは人がつくる」。

何年たっても変わらない、不変のものです。未来の子どもたちのために、100年後の大津町を私たちが創っていきましょう。

特集「有り難う」 終